「言は肉となった」（ヨハネによる福音書一・一四～一八）

1　クリスマス

今日はクリスマス（降誕節）礼拝です。救い主がお生まれになったことを喜び、賛美する礼拝です。

教会の暦、あるいは行事日には、大切な、特別な日がいくつもあります。しかしクリスマスはその中でも特別で、私ども教会にとってだけでなく、一般の社会にとっても大きな意味をもった日です。

皆さん方にとっても、自分の人生の歩みのいわば基準の日として振り返る方も多いのではないでしょうか。

教会の役員と牧師の奉仕の一つとして、会員の受洗日をおぼえて、お祝いの葉書を差し上げることになっていますが、クリスマスが、当然のことでしょうけれど、ものすごく多いのです。その方々にとっては、イエス・キリストの誕生がそのまま新しい自分の誕生（新生）ともなっているのです。

今日ここには求道者の方々もおられます。その皆さんにとっても、今日もその一つの日ですけれど、クリスマスは、自分の人生を振り返るよい手掛かりともなると思います。

子供のとき、近くのクリスマス子供会に行ったことがある、そこでプレゼントをたくさんもらったとか、学校でクリスマス礼拝をはじめて経験したとか、クリスマスの美しい讃美歌に感銘を受けたとか、喜びであれ悲しみであれ、あのときは、クリスマスの頃だったとか、です。できたらそうしたことを、ぜひとも聞かせていただきたいと思いますが、いま、そうしたことができにくいのは残念なことです。

私にとっては、昔々ドイツに留学していた頃のことが、楽しい思い出として記憶に甦ってきます。「本場の」クリスマスとは、どんなものかと、何でも経験したくていたのでしょう。私の先生（ゲルハルト・ザウター）宅のクリスマスは、ドイツのプロフェッサー〔教授〕の典型的なクリスマスでした。書斎にまず通され、しばし歓談し、食卓につきます。スピーチが回ってくるのでひやひやで、何を食べたかはまったく記憶にありません。プレゼントは、はじめから、ツリーの下に置かれていて、それを皆さん最後に頂く。先生についている三～四人のドクター〔博士〕候補生と私も頂いたと思います。

午後一一時ごろ、お開きです。先生夫妻は、それからオーバーを着込んで近くの教会の礼拝に出かけたのを覚えています。二四日の真夜中、午前零時からの礼拝がどこももっとも盛んで華やかなものになります。日付が変わって二五日に御子は誕生するわけです。数年前、メールで、何十年か前のあのときのパーティーは忘れられないと書いたら、お元気で返信してくださいました。

もちろん、こうした楽しい思い出ばかりではありませんけれど、クリスマスは、私ども一人ひとりにとって、それをきっかけに自らの来し方を思い起こす一つの手掛か

りのような日でもあります。

さてクリスマス。クリスマスの〈クリス〉はキリストの意味です。クリスマスの〈マス〉は、礼拝を意味する〈ミサ〉から来ています。ミサには派遣、差し向けるという意味もあります。神の御子が救い主として世に派遣された、差し向けられたということです。その意味でクリスマスは、救い主が私どものところに来てくださったことを神に感謝するときでもあります。

2　誕生の次第

今日のクリスマス、聖書は、ヨハネによる福音書です。今日お読みしたところ、とり分け一四節の言葉は、まさにヨハネの描くイエス・キリストの誕生、クリスマスの出来事です。

言は肉となって、わたしたちの間に宿られた（一・一四）。

「言」とはイエス・キリストを指します。「肉」とは人間を意味します。ただしかしこれだけでは、私どものイメージの中のクリスマス、ご降誕とは結びつきにくいので、はじめに他の福音書、マタイやルカによって、誕生の次第を振り返っておきます。そしてそれから、ヨハネがこのような表現で伝えようとしたことを考えてみたいと思います。

何よりも聖書が、ルカによる福音書（第二章）などによって強調しているのは、救い主イエスの誕生が、私どもの歴史の中で起こった、世界史のただ中で起こった、日付と場所をもった出来事、私どもが毎日生活しているのと同じ平面での出来事として書き記していることです。イエスの誕生の聖書の物語は、作り話でも、おとぎ話でもないのです。

そのため聖書は、イエスの生まれときのローマ皇帝が「アウグストゥス」であったといい、ヨセフとマリアがベツレヘムに向かったのは、「キリニウスがシリア州の総督であったときに行われた最初の住民登録」のためであったなどと、歴史の事実をはっきり書いているのです。

さてイエスの母は、皆さんご存じのように、マリアです。彼女はガリラヤのナザレ出身の若い処女（おとめ）です。それ以上の詳しいことは書いてありません。貧しいながら、信仰深い女性でした。

父はヨセフです。ダビデの家系につながる人です。住民登録のさい、彼は、身重のマリアを連れて、ユダヤのエルサレム、その近くベツレヘムに行っているのは、出身地がその近辺だったからです。

しかしこのヨセフは、マリアと婚約、結婚する頃には、ガリラヤで、大工として仕事をしていたと思われます（マタイ一三・五五）。どのようにして知り合い、結婚したかなど、聖書にはありません。聖書に伝えられているのは、二人が婚約中、結婚前に、マリアが身重になったという事実です。このことは、とくにマタイに伝えられて

います。

母マリアはヨセフと婚約していたが、二人が一緒になる前に、聖霊によって身ごもっていることが明らかになった。夫ヨセフは正しい人であったので、マリアのことを表ざたにするのを望まず、ひそかに縁を切ろうと決心した。このように考えていると、主の天使が夢に現れて言った。「ダビデの子ヨセフ、恐れず妻マリアを迎え入れなさい。マリアの胎の子は聖霊によって宿ったのである。マリアは男の子を産む。その子をイエスと名付けなさい。この子は自分の民を罪から救うからである」（一・一八～二一）。

マタイのいま読んだ場面は、ガリラヤでのことです。このあとヨセフは、身重のマリアを連れて、ガリラヤから、住民登録のためユダヤに行ったわけです。

先ほどは、聖書は、救い主イエスの誕生を伝えるのに、それは私どもの歴史のただ中で起こったこと、私どもの生活と同じ平面での出来事であることを強調していると申しました。

しかし同時に私ども、聖書は、イエスの誕生を、たんなる一人の人間の誕生とは見ていないことも、きちんと知っておかないと、イエス・キリストについての聖書の言葉を正しく受けとることはできないのです。このマタイの箇所は、それを明らかにしている箇所です。

とり分けこの中の「聖霊によって身ごもっている」、「聖霊によって宿った」というような言葉は、聖霊をいわば父の位置に置いています。イエスが神に由来することを明らかにしようとしています（使徒信条、参照）。聖書の受けとめに従えば、イエスは神の子であり、どこまでも神の子です。と同時に、イエスは人の子であり、どこまでも人の子です。私どもは、人として苦しむ中に（ゲッセマネの祈り）、神の子の姿を見、神の子の栄光において（山上の変貌）、人の子を見るのです。神と人とがイエスにおいて混じり合って特別な性質をつくっているというのは、キリスト教の歴史の中では、はじめから正しい理解とは認められていません。イエス・キリストはまことの神でありまことの人として特別なのです、彼は神の独り子であり、主であり、メシアです。今日は詳しく申し上げられませんが、注意しておいていいことです（四五一年「カルケドン信条」参照）。

3　言は肉となった

いま、イエスの誕生の次第のごく一部だけ、むしろ皆さんに思い出していただきたく少しく申し上げました。

いま申し上げたイエスの誕生のことを、ヨハネによる福音書は、きわめて独自な言い方で、すなわち、「言は肉となって、わたしたちの間に宿られた」という言葉で言い表したのです。

まず単純なことから申しますと、ここで「言」の一字が使われています。もとの言葉はギリシャ語の「ロゴス」です。これは基本的には言葉という意味ですが、聖書は

言の一字を用いることによって、一般的に私どものいう言葉でないことを示しています。結論からいうと、この言は、イエス・キリストを表しています。この福音書の冒頭の有名な言葉からして、まさにそうです。「初めに言があった。言は神と共にあった」。神と「共にあった」というのですから、神とは別の存在です。しかし初めからあったわけですので、この神と等しい方です。いずれにせよ、ここの言とは、神の子イエスのことです。

その上でこんなふうに考えたらどうでしょうか。言葉というのは一般に思いを、心を表現するものです。そうすると、この言とは、神の思いを、神の心を表現したものです。神の心が受肉し、人となって、私どもと共に生きるようになった。イエスの言葉も、イエスの振る舞いも、いや生き死に、存在そのものが、そのままで、私どもに対する神の言葉であり、神からの語りかけなのです。そのようにイエスを通して神は私どもと共にいます。イエス・キリストはインマヌエル〈神は我々と共におられるという意味〉マタイ一・二三を参照せよ）の神です。

さて「肉となって」にも注意したいと思います。言葉は肉となった。「肉」という言葉は、聖書では、しばしば人間を表す比喩です。肉だけだから霊は入らない、精神的なものは入らないというのではありません。人間全体をあらわします。肉になったというのは、ある特定の一人の人になったというより、人間そのものになったということです。

肉という言葉はまた、聖書では、霊的なものと相容れないものとしてとらえられています。それゆえ肉の思い、肉の欲望（ガラテヤ五章）は、人間の罪深い側面の表れです。言が肉となった、というとき、私ども人間の上品な部分だけの人間になったというのではありません。

肉となったというのは、そうした人間の、愛に乏しく、自分だけの利益を求めるような、謙遜など少しも知らない罪の側面、それら全部をひっくるめて、肉となったのです。言が肉となったということは罪深い、死すべき人間になった、この肉の性質をも言は自らに受け入れたのです。

なぜそうしなければならなかったのでしょうか。神の子はなぜ人にならなければならなかったのでしょうか。人が神の子となるためです。人は自分の力によって神にまで昇ることはできません。それゆえ神はイエスにおいて低きにくだり、十字架の死によって私どもの罪を清め、神へと救い上げてくださるのです。

ヨハネの手紙一に、次のような言葉があります。

イエス・キリストが肉となって来られたということを公に言い表す霊は、すべて神から出たものです（四・二）。

反対に、神は神なのだから肉をとって自らを汚すことなどないとして、受肉を認めない霊は、神から出ていないのです（四・三）。それこそ誤りです。神が人となってわたしたちの間に宿ったこと、このクリスマスの出来事の中に、私どもの救いの根拠があるのです。

（二〇二二・一二・二五）